バカと猫と召喚獣

夜月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカと猫と召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ００２９Ｍ

【作者名】
夜月

【あらすじ】
初心者投稿です。変な表現があるかも知れませんが広い心で見てください。

夢主設定～（前書き）

あれこれ悩んでたら投稿遅れました。すみません；

夢主設定〜

名前：猫宮　リン。

髪は銀髪で猫の耳のような癖毛、

瞳の色：紫で若干垂れ目

一人称：私

性別：女子

召喚獣：やっぱり猫耳が付いていて武器は猫じゃらし

　腕輪の能力は大量の猫を召喚し攻撃させる（ただし猫１匹の攻撃力は３０で固定で、猫の数は最大１０匹まで）

特徴：人が呼んでいる名前しか覚えられない（姫路瑞希＆ａｍｐ；木下秀吉を除く）

例）土屋康太＝みんなが言っていたからムッツリーニ君、

　吉井明久＝雄二が明久と呼んでいたから明久君、

　坂本雄二＝明久が雄二と呼んでいたから雄二君

夢主設定～（後書き）

こんな感じになりました～
またちょこちょこ変わるかもしれませんが大体こんな感じで進めます～

第1話　バカとネコ？（前書き）

文才がかぎりなくないので超駄文ですが最後まで見てくれるとうれしいです。

第1話　バカとネコ？

第1問
次の英文を訳せ
Ｓｈｅ　ｂｅｃａｍｅ　ｓｅｎｔｉｍｅｎｔａｌ　ｆｅｅｌｉｎｇｓ．

姫路瑞希の答え
（彼女は感傷的な気持ちになった）

教師のコメント
（正解です。特に言うことはありません）

吉井明久の答え
（彼女はセンチメートルな気持ちになった）

教師のコメント
（彼女の気持ちは物差しで計れるのでしょうか？）

猫宮リンの答え
（彼女「猫の足跡」な気「猫の足跡」になった）

教師のコメント
（あなたの事ですから正解なのでしょうが猫の足跡で回答が見れないのが残念です。

今度からは猫を机（卓袱台）の上に乗せないように気をつけてください。）

文月学園に来て2度目の桜を見ながら歩いている。

玄関の前には1人で立っている西鉄先生がいた。

「遅刻だぞ、猫宮」

猫宮『…おはよう…ございます西鉄先生…』

鉄人（西村）「猫宮、お前西村先生と呼べ…まったく、鉄人と言われることはあっても西鉄と言ったのはお前が初めてだぞ」

猫宮『すみません…誰かがそう呼んでいた…気がしたから…』

鉄人（西村）「まあいい、クラス発表の紙だ。受け取れ」

開くとその紙には、Fと大きく書かれていた。

鉄人（西村）「猫宮、お前はテストの日くらいその猫達を置いてはこれなかったのか？」

私は、テストの日そばにいつも付いている猫達で教室から追い出されていた…

猫宮『何回か…離したんですけど離れてくれませんでした』

鉄人（西村）「そうか……じゃあもう行っていいぞ」

そう言われ私はFクラスへと向かいはじめた、後ろから鉄村？先生がため息をついていたが気にせずに歩いていった。

途中Aクラスの設備をチラ見したけど、どこかの高級ホテルのような教室に少しおどろきつつFクラスへと向かった。

？　「すいません　ちょっと送れちゃいましたっ♪」

？　「早く座れ！！この蛆虫野郎！」

台無しだ！！

？　「聞こえないのか？あぁ？」

Fクラス前まできたらすごい罵倒されてる人がいた。

猫宮　『…あの、すみません…通してくれませんか？』

罵倒されてた人は…明久君で罵倒した人は…雄二君だった…

二人とも去年のクラスメイト……なんだけど苗字忘れた…

明久　「あ、ごめん、あれ？猫宮さん？道に迷ったの？ここはＡクラスじゃないよ？」

猫宮　『私…テストを受けさせて貰えなかったから』

明久　「あ、そうなんだ…ごめん」

猫宮　『ううん…いいの』

明久　「ところで、雄二はなにやってんの？」

明久君が教壇にいる雄二君に疑問を言った。

雄二　「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がってみた」

明久　「先生の変わりって、雄二が？なんで？」

雄二　「一応このクラスの最高成績者だからな」

明久　「え？じゃあ」

雄二　「あぁ、俺がＦクラス代表だ」

雄二君はそういいながらなにかを企んでいるような笑みを浮かべていた…

？　「えーとちょっと通してもらえますか『ニャー』？」

私の周りにいる猫達が鳴いて明久君が笑いをこらえていた…

？　「……それと席についてもらえますか？ＨＲを始めますので」

Ｆクラス担任と思われる先生は猫と明久の存在をスルーして雄二君と私に言った。

？　「えーおはようございます」

？　「二年Ｆ組担任の……」

？　「…福原慎です。よろしくお願いします」

福原先生が黒板に名前を書こうとしたらしいがチョークでさえ用意されてない教室だったみたいだ

福原　「まずは設備の確認をします。」

福原　「卓袱台・座布団、不備があれば申し出てください」

Ａクラスとは設備が天と地ほどにもちがっていた

福原　「えー必要なものは極力自分で調達してください」

Ｆ男子１　「せんせー俺の座布団ほとんど綿が入ってないですー」

福原　「あーはい、我慢してください。」

Ｆ男子２　「先生、俺の卓袱台の脚が折れているんですが」

福原　「えー我慢してください」

F男子3　「先生、窓ガラスが割れて隙間風が寒いんですが」

福原　「えーはい、我慢してください」

F男子3　「がまんできるか！！」

福原　「はっはっは、冗談です。木工用ボンドとビニール袋とセロハンテープの支給を申請をしておくのでそれで直してください」

福原先生が冗談にならない冗談を言っていた。

福原　「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね…廊下側の人からお願いします。」

秀吉　「木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる」

秀吉は私の去年のクラスメイトで一番仲のいい友達、一応男の子なんだけど周りには女の子として
扱われているそれほどかわいいということみたい…

秀吉の自己紹介が終わり私の番になった。

猫宮　『…えっと…猫宮…リンです、趣味は日向ぼっこです「ニャー」』

ちょっと猫の鳴き声が混ざったけど自分の自己紹介をした。

Fクラスの男の子数名が気絶していたけど見なかったことにした…

土屋　「……土屋康太」

私と…似たような？喋り方のムッツリーニ君だね…

そういえば…このFクラス男の子多いよ

？　「島田美波です海外育ちで日本語の読み書きが苦手です」

女の子がいた…よかった…私一人かと思ったよ

美波　「趣味は吉井明久を殴ることです☆」

ちょっと危ない趣味だね…卒業してもその趣味は続くのかな…

明久　「誰！ピンポイントかつ危険な趣味を持つのは！？」

美波　「はろはろ～吉井今年もよろしくね」

美波ちゃんのちょっと危険な自己紹介が終わった。

F男子４「須川です、よろしく」

明久　「えーっと、吉井明久でっす！気軽に　ダーリン　って呼んでくださいね♪」

F男子全員「「「ダァァァァァリィィィィン！！」」」

明久　「し、失礼。忘れてください、とにかくよろしくお願いします。」

明久君は苦笑いをしながら席に座った。

私と猫はFクラス男の子の　ダーリン　という叫び声で少しびっくりした…

けど…このクラス楽しいな……

私がびっくりしている間に教室のドアが開いた。

？　「あの、遅れて、すみま、せん」

あ…瑞希ちゃんだ…なんでFクラスに？

F全員　「「「え？」」」

クラスの全員が驚愕の声を出した。

そんな中福原先生が瑞希ちゃんに声をかけた。

福原　「丁度よかったです。今自己紹介をしていたところなので姫路さんもお願いします」

瑞希　「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします……」

F男子1「はい！質問です！」

瑞希　「あ、は、はいっ、なんですか？」

F男子1「なんでここにいるんですか？」

F男子1は…とらえかたによってはかなり…失礼なこと言ってるよ…
まあ…わかるけど…瑞希ちゃん成績優秀だもんね…

瑞希　「そ、その…振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして…」

なるほど…瑞希ちゃん体弱いからな…途中退席しちゃったんだ…

瑞希　「で、では、1年間よろしくお願いしますっ！」

瑞希ちゃんは自己紹介を終えて…明久君・雄二君の隣の席に着いた。
なんか…明久君達が騒いでいて、福原先生が教壇を叩いた…

福原　「はいはい。そこの人たち静かにしてくださいね」

瑞希&明久　「あ、すみませ…」

バキィ　バラバラバラ

教壇が跡形もなく崩れた……腐ってた？

福原　「……え～替えを用意してきます。少し待っていてください。」

ちなみに…崩れた木の残骸を少し分けてもらって猫の爪とぎに用に使わせてもらうことにした。

明久　「……雄二、ちょっといい？」

明久君と雄二が教室から出て行った。

秀吉　「リン、ちょっといいかのぅ？」

猫宮　『ん…なに？秀吉…』

秀吉　「リン、お主は、なぜＦクラスになったんじゃ？」

猫宮　『…猫がいたから教室から追い出された…』

秀吉　「そうか、それは難儀じゃったのぅ」

猫宮　『そうでもない…秀吉とかいるし…』

秀吉　「／／／そ、そんなこと言われたら照れるのぅ」

…後ろでムッツリーニ君がカメラで秀吉を撮っていたけど…気にしない…

秀吉と話ていたら教室に明久君・雄二君と福原先生が帰ってきた…

福原　「では、坂本君、君が最後の一人ですよ」

雄二　「了解」

雄二君がゆっくりと教壇の上に立った

雄二　「Ｆクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

明久　「じゃあ、馬鹿で」

ヒュン！

明久の顔ギリギリのところにカッターナイフが飛んできた。

雄二　「次は耳に当てる……」

明久　「ごめんなさい…」

雄二　「さて、バカのせいで話がずれたが……皆に一つ聞きたい」

かび臭い教室、綿の少なすぎる座布団、薄汚れた卓袱台

雄二　「Aクラスは、冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが……不満はないか？

F男子　「「「大ありじゃぁぁぁ」」」

2年F組男子生徒が叫んだ。

あ……福原先生の顔が引きつってる……

雄二　「だろう？俺だってこの現状は多いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

F男子全　「「「そうだそうだー」」」

F男子1　「学費が安いからって、この設備はあんまりだ！改善を

要求する！」

F男子２　「Ａクラスだって同じ学費だろ！？差が大きすぎるぞ！」

…不満爆発だね…

雄二　「みんなの意見はもっともだ。そこで」

雄二　「これは代表としての提案だが……」

雄二君は悪戯をする前の子供みたいな笑顔で言った。

雄二　「……Ｆクラスは Ａクラスに”試験召還戦争”を仕掛けようと思う」

第1話　バカとネコ？（後書き）

こんちわ～夜月です。
ここまで読んでくれてありがと～♪
いや～小説とか漫画とかアニメとか混ざりすぎだねw
こんな小説だけど面白かったりしたら感想お願いします。

第二話　Dクラス宣戦布告？（前書き）

第二話ですよー、オリジナルキャラまだまだ戦いません；
いつになるかなー；

第二話　Dクラス宣戦布告？

第2問
次の問いに答えなさい。

『調理のために火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウム
を材料に選んだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点と
マグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい。』

姫路瑞希の答え
（問題点…マグネシウムは炎にかけると激しく
酸素と反応する為危険であるという点。
合金の例…ジュラルミン）

教師のコメント
（正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、
姫路さんは引っかかりませんでしたね。）

土屋康太の答え
（問題点…ガス代を払っていなかったこと）

教師のコメント

（そこは問題じゃありません。）

吉井明久の答え
「合金の例…未来合金（↑すごく強い）」

教師のコメント
（すごく強いと言われても…）

猫宮リンの答え
（問題点…周りの猫達が鍋に入ってしまうこと）

教師のコメント
（猫鍋ですか…一時はやりましたね…）

Aクラスへの宣戦布告？その単語に
Fクラスから悲鳴が聞こえてきた…
F男子1　「勝てるわけがない」
F男子2　「これ以上設備が落とされるなんて嫌だ」

F男子3　「猫宮さんと姫路さんがいてくれたらこんなとこでもパラダイスだからなにもいらない」

私の名前がでた…けどなんでだろう？

「ここ文月学園では、一定時間内ならテスト点数無制限で、科学、オカルト、偶然で作られた「試験召還システム」

テストでの点数に応じた強さを持つ「召還獣」を教師の立会いの下に呼び出し、戦わせることができるシステムだ。

それが試験召還戦争である。　ｂｙ鉄人」

西鉄先生…ありがとう…ございました。

なので、最弱クラスであるFクラスに勝てるとは思えない。

雄二　「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

秀吉　「自身満々じゃのぅ」

猫宮　『そう…だね、なにか作戦でもあるのかな…』

秀吉が私にひそひそと声を掛けてきた…

F男子1　「なにを馬鹿なことを…」

F男子2　「できるわけがない」

F男子３　「何の根拠があってそんなことを」

教室に否定的な意見が飛び交うが、雄二は不適な笑みを浮かべていた。

雄二　「根拠ならあるさ。このクラスには試験召還戦争で勝つことの出来る要素が揃っている」

F男子４　「その根拠とは？」

雄二　「それを今から説明してやる」

雄二　「おい、康太。畳に顔をつけて姫路と猫宮のスカートを除いてないで前に来い」

土屋　「……！！（ブンブン）」

瑞希　「はっ、はわっ！？」

猫宮　『……／／／』

すごい勢いで顔と手を左右に振り否定のポーズを取るムッツリーニ君。

ムッツリーニ君は顔についた畳の跡を隠しながら教壇へ上った。

雄二　「土屋康太。こいつが有名な、ムッツリーニだ」

土屋　「……！！（ブンブン）」

Fクラス男子が…ムッツリーニ君のことを聞かされ畏敬していた…
なんでだろう？

F男子1　「ムッツリーニだと…？」

F男子2　「馬鹿な！奴がそうだというのか！？」

F男子3　「だが見ろ、あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ…」

F男子4　「あぁ。ムッツリの名に恥じない姿だ…」

姫路&リン　「『？？？』」

瑞希と私は頭に？を浮かべていた…

雄二　「姫路のことは説明する必要はないだろう。皆だってその力は知っているはずだ」

瑞希　「えっ？わ、私ですかっ？」

雄二　「あぁ。うちの主戦力だ。期待している」

F男子1「そうだ！俺達には姫路さんがいるんだった！」

F男子2「彼女ならAクラスにも引けをとらない！」

F男子3「彼女さえいればなにもいらないな」

さっきから瑞希大人気だ…

雄二　「それに猫宮だっている！」

F男子1「あの、猫耳髪の子だろう？」

F男子2「たしかにあの猫耳髪は反則だ」

雄二　「違う、たしかに猫耳髪は似合っているが…
　　猫宮は霧島翔子をも抜く主席だ」

猫宮　『この髪はただの癖で…わざとじゃない…』

F男子1「語尾にニャーでもつけたらいいな！」

F男子2「そんなのつけられたら萌え死んでしまう！」

萌えってなんだろう……あとで秀吉にでも聞いてみよう…

雄二　「木下秀吉だっている」

秀吉は演劇部のホープで、双子の優子さんとか、他の事で有名らしい…

F男子1「おぉ……！」

F男子2「あぁ。アイツ確か、木下優子の……」

雄二　「当然俺も全力を尽くす」

F男子1「何かやってくれそうな奴ではある」

F男子2「たしか、小学生の時は神童と呼ばれていなかったか？」
F男子3「じゃぁ振り分け試験の時は姫路さん達と同じように理由があるのか！？」
F男子4「実力はAクラスレベルが3人もいるってことだよな！？」
なんか…みんなテンション高いなぁ…
雄二　「それに、吉井明久もいる」
F男子1「誰だ？吉井って」
F男子2「そんな奴いたか？」
明久　「もう忘れらてる！？」
F男子3「そんな奴このクラスにはいない」
明久　「存在否定！？」
明久君がかわいそうだよ……
明久　「ほら！雄二！場が白けちゃったじゃないか！」
明久　「なんで雄二は僕を睨むんだよ！」
雄二　「そうか、知らないのなら教えてやる」

雄二　「こいつの肩書きは、「観察処分者」だ！」

F男子1「それってバカの代名詞じゃなかったか？」

明久　「ちっ、違うよ！ちょっとお茶「そうだ！バカの代名詞だ」よ」

雄二　「肯定するな！バカ雄二！」

瑞希＆猫宮「『それってどういうことなの？』ですか？」

雄二　「脳味噌がツルッツルってことだ」

明久　「何だよツルッツルって！」

観察処分者、具体的には教師の雑用係であり、力仕事雑用を特例とし物に
触れるようになった召喚獣のことである。
ただし、処分者の召喚獣の疲れや痛みが召喚者にたいして何割かフィードバックされるのである。　ｂｙ西村（鉄人）

雄二　「つまりは明久と明久の召喚獣はほぼ一心同体ということだ」

瑞希＆猫宮「『へーすごいんだね…』ですねー」

瑞希　「召喚獣は見た目と違って力持ちらしいですし」

明久　「あはは、でも、召喚獣の疲れ、痛みの何割といっても十分痛いし、疲れるし僕にはなんのメリットもないしね」

F男子1「だったら、召喚獣がダメージを食らったら召喚者も相当苦しいってことだろ？」

F男子2「だよな…それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるって事じゃん」

雄二　「気にするな！いてもいなくても大して変わらん雑魚だ」

明久　「雄二…そこは僕をフォローするとこだよね？」

雄二　「とにかくだ！俺達の力の証明としてまずはDクラスを征服してみようと思う」

雄二　「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

F男子全員「「「当然だぁー！！！」」」

雄二　「ならば全員筆を執れ！！出陣の準備だ！」

F男子全員「おぉーーッ！！」

雄二　「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！」

F男子全員「「「うぉぉぉぉーーーッ！！」」」

瑞希　「おッ、おぉー」

瑞希ちゃんは…雰囲気に圧されてか小さな拳を作っていた…

雄二　「明久、お前にはＤクラスへの宣戦布告の使者になってもらう！大役を果たせ！」

明久　「……大抵下位勢力の使者ってすごくひどい目に合わせられるよね？」

雄二　「大丈夫だ！やつらがお前に危害を加えることはない。だまされたと思って行って来い！」

明久　「本当に？」

雄二　「もちろん、俺を誰だと思っている？」

雄二が笑いながら明久君に力説している。

雄二　「大丈夫だ！俺を信じろ、俺は友達に嘘をつく事はない」

明久　「わかったよ、それなら使者は僕がやるよ」

猫宮　『私も…付いて…行こうか？』

明久　「大丈夫だよ、雄二もああ言ってるし僕一人で大丈夫だよ」

猫宮　『そう…わかった…』

雄二　「よし、明久！逝って来い！」

明久　「字が違うよ！？」

明久君はそう雄二君にツッコミながらＤクラスへ向かった…

明久　「騙されたぁぁぁぁッ！」

明久君が叫び転がり込んできた…

雄二　「やはりそうきたか…」

雄二君は悪びれる様子もなくそう言った…

明久　「やはりってなんだよ！やっぱり使者への暴行は予想通りなんじゃないか！」

雄二　「当然だ！そんなことも予想できないで代表が務まるか」

明久　「少しは悪びれろよ！」

瑞希＆猫宮　「吉井君大丈夫『明久君…大丈夫？』ですか？」

明久　「あ、うん大丈夫、ほとんどかすり傷だよ」

美波　「吉井、本当に大丈夫？」

明久　「平気だよ、心配してくれてありがとう」

美波　「よかった、私が殴る余地はまだあるんだ……」

明久　「ああっ！もう駄目！死にそう！」

猫宮　『だ…大丈夫？』

私は心配そうに吉井君を見つめた…

ＦＦ団　「総員吉井をねらえぇぇ！」

明久　「なんでみんな僕にカッターを向けるのさ！？」

明久君の悲鳴が教室に響き渡った…

美波＆瑞希　「「猫宮さんずるい…」です…」

猫宮　『？？？』

雄二「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ」

雄二君は扉を開けて出て行った…

秀吉　「大変じゃったのぅ」

秀吉が明久君の肩を軽く叩いてから教室を出た。

康太　「……（サスサス）」

ムッツリーニ君が頬をさすりながら続いた

明久　「ムッツリーニ。覗いていた時の跡はもう消えてるよ？」

康太　「……！（ブンブン）」

明久　「……何色だった？」

康太　「……水色、猫宮は猫でガードされてて見えなかった…」

ムッツリーニ君と明久君はなぜか悔しそうだった…なんでだろう？

美波　「吉井、早く来なさい」

明久　「あー、はいはい」

美波　「返事は一回！」

明久　「へーい」

美波　「……一度、Ｄａｓ　Ｂｒｅｃｈｅｒ――ええと、日本語だと……」

康太＆猫宮　「『……調教』」

明久　「調教って。せめて教育とか指導って言ってくれない？」

美波　「じゃ、中間とってＺｕｃｈｔｉｇｕｎｇ――」

康太　「……それはわからない」

猫宮　『……折檻？』

明久　「それって悪化してるよね？」

美波　「そう？」

明久　「何でムッツリーニはドイツ語を知っているの？」

康太　「……一般教養」

明久　「相変わらずムッツリーニは性に関する知識だけズバ抜けてるね」

猫宮　『そう…なの？』

康太　「……（ブンブン）」

明久　「そういえば、前から気になってたんだけど、なんで猫宮さんは、僕や雄二のことを苗字じゃなくて名前で呼ぶの？」

猫宮　『苗字…忘れた…から…』

明久　「そっかー、忘れちゃったんだったらしょうがないね」

猫宮　『（コクリ）』

そんな会話をしながら校内を歩いていたら、雄二君が屋上の扉を開いて出た

雄二　「明久、宣戦布告はしてきたな？」

雄二君がそういいながらフェンスの前にある段差に腰を下ろした。

明久　「一応今日の午後に開戦予定と告げて来たけど」

それに習ってみんな各々腰を下ろした。

美波　「じゃあ、先にお昼ご飯ってことね？」

雄二　「そうなるな、明久、今日の昼ぐらいはまともな物を食べろよ？」

明久　「そう思うならパンでもおごってくれると嬉しいんだけど？」

瑞希　「えっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

明久　「いや。一応食べてるよ」

秀吉　「明久よ、あれは、食べていると言えるのかのぅ？」

秀吉　「お主の主食は――水と塩じゃろう？」

明久　「ちゃんと砂糖だって食べてるよ！」

雄二　「それは、食べるとは言わないぞ」

猫宮　『舐める…が正しい…ね』

みんなが優しい目で明久を見ている

私は、今まで猫に上げていたニボシを明久に渡した…

明久　「やめて！僕をそんな目で見ないで！あと猫宮さん哀れみの目を向けながらニボシ１個を差し出すのやめて！？」

雄二　「ま、食事代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

明久　「し、仕送りが少ないんだよ！」

瑞希　「……あの、よかったら私がお弁当作ってきましょうか？」

私の背中がゾクリとした……なぜ？

明久　「え？」

明久　「本当にいいの？」

瑞希　「はい、明日のお昼でよければ」

雄二　「良かったじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」

明久　「うん！」

美波　「……ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」

瑞希　「あ、いえ！その、皆さんにも……」

雄二　「俺達にも？いいのか？」

瑞希　「はい。嫌じゃなかったら」

秀吉　「それは楽しみじゃのう」

康太　「……（コクコク）」

美波　「……お手並み拝見ね」

猫宮　『7人分も…大変だろうから』

猫宮　『私も……明日作ってくるよ…みんなの分…』

猫宮　『瑞希ちゃん…半分私が持ってくるから…いい？』

瑞希　「あ、はい。お願いしますね」

明久　「姫路さんと猫宮さんって優しいね」

瑞希＆猫宮　「『そんなことない…』です」

明久　「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君達のこと好き……」

雄二　「おい明久、今振られると弁当の話はなくなるぞ」

明久　「……にしたいと思ってました」

秀吉　「明久よ、それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」

雄二　「　明久、お前はたまに俺の想像を超えた人間になる時があ

るな」

明久　「だって……お弁当が……」

雄二　「さて、話がかなり逸れたな、試召戦争に戻ろう」

秀吉　「　雄二、一つ気になっていたんじゃが、どうしてDクラスなんじゃ？
　段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

瑞希　「そういえば、確かにそうですね」

猫宮　『そう……だね』

雄二　「まぁな、当然考えがあってのことだ」

瑞希　「どんな考えですか？」

雄二　「色々と理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

明久　「え？でも、僕らよりはクラスが上だよ？」

雄二　「点数だけな」

雄二　「オマエの周りにいる面子をよく見てみろ」

明久　「えーっと……」

明久が、周りを見渡す。

明久「美少女三人と馬鹿が二人とムッツリが一人と猫が１０匹いるね」

雄二　「誰が美少女だと！？」

明久　「ええっ！？雄二が美少女に反応するの！？」

康太　「……（ポッ）」

猫宮　『私は…猫じゃない…』

明久　「ムッツリーニまで！？どうしよう、僕だけじゃツッコミ切れない！」

秀吉　「まぁまぁ。落ち着くのじゃ、代表にムッツリーニにリン」

雄二　「そ、そうだな」

明久　「いや、その前に美少女で取り乱すことに対してツッコミ入れたいんだけど」

雄二　「ま、要するにだ」

明久君また無視されてる……

雄二　「姫路や猫宮に問題のない今、正面からやり合ってもＥクラスには勝てる。

Ａクラスが目標である以上はＥクラスなんかと戦っても意

味が無いってことだ」

明久　「？それならＤクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

雄二　「ああ、確実に勝てるとは言えないな」

明久　「だったら、最初から目標のＡクラスに挑もうよ」

雄二　「派手にやって今後の景気づけにしたいだろ、それにＡクラスに勝つ作戦に必要なプロセスだしな」

瑞希　「あ、あの！」

雄二　「ん？どうした姫路」

瑞希　「吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合っていたんですか？」

雄二　「ああ、それか、それはついさっき、姫路の為にって明久に相談されて――」

明久　「それはそうと！」

明久君が雄二君の言葉を遮るように大きな声を出した。

明久　「さっきの話、Ｄクラスに勝てなかったら意味がないよ」

雄二　「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる。いいか、お前ら。ウチのクラスはーー最強だ」

雄二君は人を操るのが得意だね……

美波　「いいわね。面白そうじゃない！」

秀吉　「そうじゃな、Ａクラスを引きずり落としてやるかの」

土屋　「……（グッ）」

瑞希　「が、頑張ります。」

猫宮　『…私も……頑張る…（・ω・）ｂ』

雄二　「そうか、それじゃ作戦を説明しよう」

涼しい風がそよぐ屋上で、私達の勝利の為の狼煙が上がった。

第二話　Dクラス宣戦布告？（後書き）

ながいなぁ
今度からちょっと短めにするかな？
こんなぐだぐだですが今後もよろしく～＾＾

第3話　Dクラス戦？（前書き）

感想くれた方ありがとうございます。
これに答えてがんばって行きたいと思います＾＾

第3話　Dクラス戦？

第三問

？～？の説明に当てはまる元素記号を次から選び、それぞれ正しい名称を
書きなさい。

『Ｍｎ　Ｏ　Ｓ　Ｎａ　Ｉ　Ｐｄ　Ｎｅ』

？体心立方構造で、水と激しく反応する。炎色反応では黄色を呈する。

？沸点１８４．２５℃、融点１１３．７５℃。これの溶液にデンプンを加える
と反応を起こし藍色を呈する。

？原子量５４。過酸化水素の水と酸素への分解反応において、これの、酸化物
が触媒として用いられる

？希ガス族・第二周期。空気を液化、分留して作られる。

姫路瑞希の答え

「？Ｎａ：ナトリウム　？Ｉ：ヨウ素　？Ｍｎ：マンガン　？Ｎｅ：ネオン

教師もコメント

「正解です。それぞれの特徴を覚えておくと、科学反応の説明などにも
つながります。基礎的な特徴はしっかりと覚えておきましょう。

猫宮リンの答え
「美波ちゃんがかわいそうです…」
教師のコメント
「なぜ、島田さんのことが関係があるのですか？」
清水美春の答え
「お姉ぇーさまのことですね！！！」
教師のコメント
「なぜ、島田さんのことが出てくるのかがわかりません」
島田美波のコメント
「書きたくありません……」
教師のコメント
「なぜ、書きたくないのですか？猫宮さんと清水さんが書いていたことに
関係があるのですか？」
土屋康太の答え
「？Ｎａ：ナ　？Ｉ：イ　？Ｍｎ：ム　？Ｎｅ：ネ」
教師のコメント
「……島田さんに謝ってきます。」

猫宮　『…じゃ…補充行ってくる…』

雄二　「おう、行って来い」

猫宮　『……瑞希ちゃん行こう…』

瑞希　「は、はい」

……夢主補充中ー

……補充終了ー

猫宮　『じゃ……Dクラス代表さんを倒しに行こうか…』

瑞希　「みんな、待ってますしね」

猫宮　『うん』

★〜明久視点〜★

平賀君の近衛部隊がいないほどに防御が薄くなっている！

明久　「チャンス！！」

雄二を殺ることが出来ない以上僕も召喚戦争に集中しよう。

美紀　「Ｄクラス玉野美希、試獣召喚」

明久　「なっ！近衛部隊！？」

突如僕の前にあらわれたのはＤクラスの女子

平賀　「残念だったな、船越先生の彼氏君？」

平賀君は勝ち誇った顔をした。

明久　「ち、違う！あれは雄二が勝手に」

平賀　「そんなに照れなくてもいいじゃないか。さ、玉野さん。彼に祝福を」

美紀　「わかりました」

明久　「ちくしょう！あと１歩でＤクラスを僕の手で落とせるのに！」

平賀　「何を言うかと思えば、彼氏君。いくら防御が薄く見えても、さすがにＦクラスの人間が近づいたら近衛部隊が来るに決まってるだろう？　ま、近衛部隊がいなくてもお前じゃ無理だろうけど」

明久　「確かに僕じゃ無理だろうね」

明久　「姫路さん、よろしくね」

平賀　「は？」

瑞希　「あ、あの……」

平賀君の後ろから、申し訳なさそうに姫路さんが肩を叩いた。

平賀　「え？　あ、姫路さん。どうしたの？　Ａクラスはこの廊下は通らなかったと思うけど」

瑞希　「いえ、そうじゃなくって……」

瑞希　「Ｆクラスの姫路瑞希です。えっと、よろしくお願いします。」

平賀　「あ、こちらこそ」

瑞希　「その……Ｄクラス平賀君に現代国語勝負を申し込みます」

平賀　「……はぁ。どうも」

瑞希　「あの、えっと……さ、試獣召喚です」

現代国語

Ｆクラス姫路瑞希　３３９点

ＶＳ

Ｄクラス平賀源二
１２３点

平賀　「え？　あ、あれ？」

姫路さんの点数は、平賀の点数を圧倒的に上回ってる

瑞希　「ご、ごめんなさい」

背丈の倍はある大剣を軽々と扱い、素早い動きで相手に肉薄する姫路さんの召喚獣。
平賀の召喚獣は反撃することすら叶わず、姫路さんの召喚獣に一撃で下され、この戦いの決着となった。

★～明久視点ＥＮＤ～★

第3話　Dクラス戦？（後書き）

Dクラス戦終わるの早Σ
戦闘のところ考えるのが難しいな～Bクラス戦はもう少し長くしてみようかな…
あと、更新が少し遅れるかも知れません気長にまっていてくれるとうれしいです。では、また～＾＾

番外編１（前書き）

番外編です。
え？本編どうしたですか？
番外編書きたかっただけです。ただそれだけですｗ
では、どうぞｗ

番外編1

ピンポ～ン

木下家のインターホンが押された。

★～秀吉視点～★

秀吉　「ん？こんな時間にいったい誰じゃ？」

優子　「秀吉～出て～」

秀吉　「姉上よＢＬ本を読んでいてよいのか？学校の者やもしれんのに」

優子　「…大丈夫でしょ、入れるなら誰が来たか教えなさいよ？」

秀吉　「了解じゃ」

ピンポ～ン

秀吉　「今出るから少し待つのじゃ」

がらがらがら

秀吉　「ん？リン？どうしたのじゃ？」

猫宮　「……今から…遊びに…でもいかないかな？」

猫宮　「…優子も…一緒に」

秀吉　「ふむ、今日は特に用事もないしわしはよいぞ？」

秀吉　「では、姉上に聞いてくるとしよう、少しまっているのじゃ」

猫宮　「…うん」

秀吉　「姉上～」

優子　「なに？」

秀吉　「リンが遊びに行かぬかと来ておるが姉上はどうするかの？」

優子　「リンが？めずらしいわね、いいわ私も行く」

秀吉　「了解した、では伝えてくるかの」

秀吉　「リン、姉上も大丈夫だそうじゃ」

秀吉　「ちょっと準備をするから少し待っていてくれんかの？」

猫宮　「…うん…わかった」

１０分後～

優子&秀吉「「またせたの「わね」」

秀吉　「ところで、どこに行くのじゃ？」

優子　「あ、私ちょっと最近出来たデパート行ってみたかったんだけどいい？」

猫宮　「うん…私も…そこ行きたかったから…」

秀吉　「では、きまりじゃの」

デパ～ト

優子　「じゃあまずは服見に行きましょ！」

猫宮　「…うん」

優子　「これ、リンに似合うんじゃない？」

そういい姉上は後ろにリボンが付いているワンピースをリンに渡した

猫宮　「…そう？…試着してみるね……」

猫宮　「…ど…どうかな…」

わしはワンピースを着たリンに見とれてしまった。

優子　「ちょっ、似合いすぎめちゃかわいい」

優子　「秀吉？」

秀吉　「に…似合っておるぞ正直見とれてしもうた」

猫宮　「そ…そう……これ…買ってくる」

そうリンが少し顔を赤くしながら言った。

優子　「次どこ行く～？」

猫宮　「もう…お昼だし…ご飯食べに行こう…」

秀吉　「そうじゃの、ここらでお昼にしようかの」

？？？「お？秀吉に猫宮じゃないかこんなとこでどうした？」

そう話しかけられ振り向いたら……雄二が買い物籠を持ち主婦スタイルでいた。

秀吉　「雄二よおぬしは食材の買出しかの？」

雄二　「あ、ああうちは大体オレが食事を作るんだ」

雄二　「母親に作らせたらうにとたわしを間違えて料理したりするからな」

秀吉　「お主も苦労しておるのう…」

雄二　「そうでもないさ…」

そう言い雄二は遠くを見ていた。

雄二　「そうだ、お前らこれやるよ」

雄二が数枚の福引券を差し出してきた

秀吉　「よいのか？」

雄二　「ああ、俺は福引には興味がないからな」

秀吉　「ふむ、ではありがたくいただくとしよう」

ご飯終了〜

（書くのがめんどくさかったわけじゃないからね　ｂｙ夜月）

秀吉　「買い物もおおかた終わったようじゃし福引でもしに行くかの」

優子　「そうね」

猫宮　「…うん」

ガランガラン〜

「次の人どうぞ～」

猫宮　「…お願い…します」

「は～い、福引券3枚で3回回してくださいね～」

猫宮　「…わかりました…秀吉先…いいよ」

秀吉　「了解した、どれ」

ガラガラ…コンッコロコロ

「白ですね、ポケットティッシュです。」

秀吉　「駄目じゃった」

優子　「次は私ね」

がらがら…コンッコロコロ

「青ですね、おめでとうございます。たわし10個セットです。」

優子　「た…たわし10個も必要なくない？」

秀吉　「たわし10個当たるから雄二はやりたくなかったのじゃな」

猫宮　「…次私だね」

ガラガラ…コンッコロコロ

「金ですね、おめでと～ございます～海沿い旅館2泊3日お泊り券です～」

「ちなみに人数は１０人までで移動費は含まれていませんのでご了承ください」

優子　「やったわねリン！」

秀吉　「さすがじゃのう」

猫宮　「……うん」

優子　「行くまでに水着も買わなくちゃだね」

秀吉　「そうじゃの、わしも今回こそ男らしい水着にするのじゃ！」

猫宮　「…秀吉は…どうゆうのが…いいのかな…」

リンがなにか言ったがわしには聞こえなかった。

秀吉　「姉上よ、なぜそんなにニヤニヤしておるのじゃ？」

優子　「秘密よ」

優子　「あー楽しみね～」

秀吉　「そうじゃの～」

猫宮　「…うん…そうだね…」

海のことで話ながら帰り今日は解散となった。

次回に続く？

ちなみに……

ガラガラ…コンッコロコロ

「青ですね、おめでとうございます～たわし１０個です。」

雄二母「あら、うにが当たったわ、今日はうに料理ね」

その日雄二の家では、怒鳴り声が響いた。

番外編1（後書き）

優子「ねぇ…私達今回出番あんまりなくない？」
猫宮「…うん」
夜月「そう？」
優子「だって秀吉しかしゃっべてなくない？」
夜月「え？だって自分秀吉大好きだからね！だしたいじゃん？」
猫宮「…私…一応主人公…だよね？」
夜月「まぁーリンっちはそのうちいっぱいでるからw」
優子「私は？」
夜月「優子は……番外編でもあまりでないかもw」
優子「……」
夜月「あ！ちょ…ちょっとまって無言…無言で関節技使わないで逆に怖いからぁぁ！！！！」
優子「…出してくれるわよね？（ニコッ）」
夜月「…はい…善処します。」
夜月「あ、そろそろ時間だから自回予告！！」
優子&猫宮&夜月「「「せーの、次回もよろしくねぇ～」」」
夜月「…遅くなるかもだけどね」
ドゴッ
夜月「死して屍拾うものなし……グフ」

番外編２（前書き）

こんばんわぁ～
お久しぶりですー夜月ですよ～みんな覚えててくれてるかな？
いや～ＰＣが故障するし就職活動しないとだし時間がぜんぜん取れませんよ～（涙
こんなグダグダな感じで進行する小説ですが良かったらこれからもヌル～イ目で
見ていってください！
では番外編２短いですがどうぞ～

番外編2

秀吉「おはようじゃ、リン」

猫宮「…おはよう…秀吉」

秀吉「ところでこの間当たった宿泊券の事じゃが
今日にでも皆にいうのかの？」

猫宮「うん…みんなにも…都合があったりしたら…いけないし…」

秀吉「そうじゃな、それがいいじゃろう」

猫宮「ところで……」

秀吉「ん？なんじゃ？」

猫宮「…ん～ん何でもない…」

猫宮が少し顔を赤らめて顔を逸らした。

秀吉「？」

～～教室～～

～★明久視点★～

明久「はぁ～」

雄二「どうした？そんな元から変な顔をさらに変にして」

明久「あ、雄二いやね？お金がなくてね」

雄二「ん？そんなの毎日、毎週、毎年の自業自得じゃないか」

明久「そんな毎日、毎年じゃないからね！？そんな事してたら
死んじゃうからね！？」

姫路&美波「吉井君！」「アキ！」

姫路さんと美波が勢い良く走ってきた

明久　「どうしたの？二人とも」

姫路&美波「「海行きますよね！」くわよね！」

明久「へ？何のこと？」

海？はて、何の事だろう？そんな事を話した覚えは僕にはないのだ
けれど

猫宮「……それについては…今から話す…よ？」

明久「あ、猫宮さんおはよう」

猫宮「……おはよ」

雄二「で、海ってどういうことだ？猫宮」

猫宮「うん…この間の…福引で…海沿いの旅館宿泊券…が当たったから…
　みんなで…行こうかなって…移動費は…各自負担になっちゃうけど…」

明久「う～ん、僕も行きたいけど移動費がかかるなら今回は辞退するよ～」

美波「アキ？い・く・わ・よ・ね？」
姫路「吉井君？い・き・ま・す・よ・ね？」

明久「いや…お金ｇ「い・く・わ・よ・ね？」はい…」

雄二「みんなという事は他にも誰か誘うのか？」

猫宮「うん…優子ちゃんに…愛子ちゃんに…翔子ちゃん…かな？」

雄二「よし！俺は辞退する！」

翔子「ダメ……雄二も来る…」

雄二「な！？翔子！？」

翔子「雄二も一緒に海に行く…」

雄二「だから俺は行かｎぎゃぁぁぁぁぁぁ」

雄二南無…

翔子「雄二が行くのは決定事項…」

翔子「雄二は責任を持って私が連れて行く…」

猫宮「あ…愛子ちゃんにも…言っといて…もらえる？」

翔子「わかった」

猫宮さんは雄二の事はスルーなんだ

～★明久視点ＥＮＤ★～

次回：今度こそ海行くかも？

ちなみに……

翔子「愛子…」

愛子「ん？なに？代表？」

翔子「…今度、リン達と海に行く」

愛子「ＯＫ～♪」

久保「なに！？猫宮君達ということは吉井君も来るという事だな！？
　僕もぜひ参加させてもらおう！」

海への旅行にホモ…もとい！アキちゃん愛好家が参加することとなった

番外編２（後書き）

ども！夜月でっす♪
ＰＣ故障に就職活動そんなことがあり投稿が遅くなるしネタ考える時間ないし
ですがこれからも気長に待っていてくれるとうれしいです！就職活動終わったら
がんばって書きますんで！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0029m/

バカと猫と召喚獣

2010年12月19日05時49分発行